法勝寺の伽藍形態とその特徴

A HISTORICAL STUDY ON THE ARCHITECTURES AND
THE PLANNING OF HOSSYOUJI TEMPLE

富島 義幸*

Yoshiyuki TOMISHIMA

Representative of the late Heian Period, many attempts have been made to reproduce the planning of Hosshouji Temple. However, unexplained aspects regarding land, architecture and planning remain. Using various materials regarding planning, archeological studies, and historical records, I will reproduce the Hosshoji's plan, then compare the Hosshouji and Houjouji, examining their continuity, and originality. Both temples were very similar in terms of their pond, architecture and Buddhist imagery; particularly, their use of the Vairocana Buddha in the main hall of both temples. Nevertheless, Hosshouji emphasis of its main hall, independent of other structures, was its most unique characteristic.

Keywords: Hosshouji, Houjouji, Planning, Central Hall, Vairocana Buddha

法勝寺, 法成寺, 伽藍構成, 金堂, 大日如来

はじめに

承暦元年(1077)、白河天皇が建立した法勝寺は、院政期を代表する寺院として、これまでに度々伽藍の復元が試みられた。

まず、福山敏男氏により「六勝寺の位置」において、法勝寺の寺地と主要な建築の形式が論じられ¹、最初の伽藍復元図が作成されている²。また、林屋辰三郎氏により福山説の寺域北限を広げる必要性が説かれ³、清水擴氏により伽藍と主要な建築の形式が再考された⁴。近年、白河の条坊計画との関りから考古学を中心に研究が進められ⁵、『甦る平安京』展に法勝寺伽藍の復元模型が出品された⁶。しかし、法勝寺の寺域はいまだ定説が得られておらず、個々の建築についても検討すべき点が残されている。

拙稿「法勝寺の伽藍と建築」⁷では、法勝寺伽藍の創建から廃絶までの沿革を検討し、先行する法成寺伽藍と共通する点が多々見受けられることを指摘した。本稿では、まず法勝寺の伽藍と建築について、これまでの復元諸説、考古学的成果に、文献史料から得られた新たな知見を合わせ、伽藍と建築を復元的に考察する。次に、この復元的考察をもとに、法成寺伽藍と比較検討し、両者の連続性、および法勝寺伽藍の独自性について論じる⁸。

1 今日までの諸説

福山氏により、白河における条坊道路の存在が指摘されて以来、発掘調査が進められ、ここでの条坊計画が必ずしも旧京城の条坊道路に則っていなかったことが明らかになりつつある。近年、最初に法勝寺造営があり、その寺域が白河の条坊計画に影響したという見方⁹が有力視され、法勝寺の寺域を明らかにすることは、白河の都市計画を考えるうえでも重要な課題となった。

福山氏は、明治初期の地籍図をもとに、西限を現在の京都市動物園西の公道あたり、東限を塔の中心から50丈程度の位置に設定し、東西は2町よりやや広くなるとする。さらに、承保3年(1076)の「法勝寺阿弥陀堂造立日時定記」¹⁰にのせる勘文の方位・寸法をもとに、押小路末の北端から二条大路末の南端までが約40丈、二条大路末の幅員が旧京城と同じ17丈であるとし、白河の条坊道路は、京城の規格に則っていたとみなす。また、阿弥陀堂の基壇の南端が押小路の北辺に当たることから、寺域の南限を押小路末より南に設定し、冷泉小路末を二条大路末から40丈北に設定して、ここを寺域の北限とする。

福山氏の伽藍復元図【図1】¹¹については、書物の性格もあって根拠は記されないが、前掲「六勝寺の位置」によって概ね知ることができる。以下に、建築の配置に関わる要点を抜き出す。

1. 金堂の南庇が二条大路北辺の延長線上にあたる。

* 日本学術振興会 特別研究員・博士(工学)

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, Dr. Eng.

2. 阿弥陀堂の基壇の南端が押小路の北辺にあたる。
3. 現曲尺で、金堂跡中心は塔跡中心の北 43 丈程、金堂跡、塔跡ともに、公道（法勝寺西面道路）の東方 42 丈程にあたる。
4. 五大堂跡は金堂跡の西方、公道と二条通との辻の東北、薬師堂は講堂の北、北斗堂、愛染堂は薬師堂の後方の左右にあたる。
5. 藤原氏の別業時代の釣殿御所は、法勝寺内の東方にある。

林屋辰三郎氏は、福山氏の復元のように、北限が冷泉小路末であったならば、金堂背後の講堂・薬師堂・愛染堂・北斗堂の配置が密になることから、北限を冷泉小路末より北に拡げる。

清水廣氏は、阿弥陀堂の南には桁行 5 間以上の南廊が付属していたことから、福山説よりも寺地をさらに南に、林屋説に従い北限を冷泉小路末より北に拡げる。清水氏は、

1. 金堂の裳階は吹き放ちで、左右の回廊は透廊の二階廊である。
2. 講堂南には、左右対称の孫庇がつく。
3. 阿弥陀堂の南には、5 間以上の廊が付属する。
4. 五大堂は裳階付きである。
5. 法華堂には僧房が付属し、築垣をめぐる。
6. 藤原氏別業の釣殿は、常行堂と御所の建設によって廃止された。常行堂には東西の廊があり¹²、回廊をめぐるして独立する。
7. 愛染堂は築垣に囲まれた一郭にあり、南と西の 2 つの門を開く。という新たな知見を加え、伽藍を復元している【図 2】¹³。なお、二条大路末の幅は狭く、その北辺は金堂南庇より南に設定される。

浜崎一志氏¹⁴は、発掘調査から想定される白河の条坊道路が、必ずしも旧京城の条坊と一致しておらず、白河の条坊が法勝寺の寺域に影響されたとみて、その北限を冷泉小路末と考える。法勝寺の西で冷泉小路末の遺構（以下、冷泉末遺構 A とする）が旧京城よりも北に検出され、遺構として南から 0.8m の溝、2.4m の築

地、3m の犬行、2.6m の溝が報告され¹⁵、浜崎氏はこれを冷泉小路末の南辺とみなす。この遺構の犬行、側溝の規模が多く、小路とは考えられないこと、行幸経路として冷泉小路末が頻繁に用いられたことから、冷泉小路末が小路の規格よりも広がったと推測する。また、福山説の寺域東限北延長上でも発掘により小路の存在が確認された¹⁶ことから、寺域の東西を 2 町より広く設定する。

『甦る平安京』展の復元模型【図 3】¹⁷における寺域・建築配置は、京都市埋蔵文化財研究所の見解に基づく¹⁸。寺域の南北を 3 町とし、清水説とは常行堂・御所などにも大きな相異がある。また、二条大路末の北辺は金堂南庇よりも北に設定されている。

上村和直氏¹⁹も寺域は東西 2 町以上、南北 2 町ないし 3 町とする。発掘調査から得られた法勝寺西面道路の幅は、溝心々で 7 丈 6 尺とされている。

近年、冷泉小路末の冷泉遺構 A の位置より南に溝（以下、冷泉遺構 B とする）が²⁰、その東延長上にも溝（以下、冷泉遺構 C とする）が発見され²¹、冷泉遺構 A は冷泉末の北辺、冷泉遺構 B、C は南辺とみなされ、その規模は小路程度（約 4 丈）とされる。

また、堀内明博氏²²により白河の発掘調査に基づく新たな地割復元が示された。法勝寺の寺域と関わる要点は以下の通りである。

1. 二条大路末は、金堂南庇より北に、その北辺のものと推定される側溝跡が発見され、その道幅は約 18 丈に想定される。
2. 法勝寺の北限を冷泉小路末とする。

【図 1】法勝寺伽藍復元図（福山説）
（福山敏男『平等院と中尊寺』より）

【図 2】同（清水説）
（清水廣『平安時代仏教建築史の研究』より）

【図 3】同（『甦る平安京』展模型）
（京都市編『甦る平安京』展覧会目録より）

2 法勝寺の寺域とその造営

2.1 法勝寺の寺域

これら諸説を整理すると、寺域の東限は塔中心から約 50 丈とする福山説が発掘の成果からも裏付けられ、西限も発掘調査により明らかになった。南限は押小路北辺より南に設定されるが、南には白川が流れ、大きくは広がっていなかったとみてよからう。

次に、諸説で最も異なる寺域北限について考察しておく。『山槐記』応保元年(1161)7月7日の条には、法勝寺への行幸経路は、

大炊御門東行、尊勝寺東大路南行、最勝寺北大路東行、法勝寺西大路南行、入御阿弥陀堂西南築垣下、

とあり、大炊御門末を東に進み、尊勝寺東の「大路」を南に下り、最勝寺北の「大路」を東へ進み、法勝寺西大路を南に下った。法勝寺への行幸では、この経路が普通に用いられたと考えられる。

『民経記』には、天福元年(1233)1月²³の法勝寺修正会にさししての行幸経路について、

大炊御門^{東行至}河原、瀬々仮橋使廳儲之如常、(中略)大炊御門末猶

東行、蓮華藏院前令給過給、至東光寺前南行、冷泉末東行、法勝寺北面大路、至法勝寺西大門大路南行、至西大門、

とある。大炊御門大路から鴨川を仮橋で渡り、大炊御門末を東に進み、蓮華藏院前を過ぎ、東光寺前を南に下り、冷泉末を東へと進み、法勝寺の西面大路を南行して西大門へと到った。ここでは、法勝寺北面は「冷泉末」、それは「大路」とされている。

先述のように、法勝寺西での発掘調査で、冷泉末とみられる遺構A・B・Cが発見され、『民経記』の記事で「法勝寺北面大路」と呼ばれる道は、冷泉末遺構に比定され、この延長上が法勝寺の北限に当たると考えられる。

ただし、『民経記』で「法勝寺北面」が「大路」、『山槐記』でも、尊勝寺東の道と冷泉末は「大路」とされる点は注意を要する。発掘成果によれば、冷泉末は小路程度の規模、尊勝寺東にも側溝が確認され、その道幅は約4丈とされる²⁴。これら行幸で用いる道は、実際には小路程度の規模でも「大路」と呼ばれていた。

2.2 旧京城二条大路と法勝寺

発掘調査に基づく『甦る平安京』展復元模型、堀内説では、白河二条大路末の北辺と金堂南庇は一致していない。これまで旧京城二条大路と白河二条大路末の関係は考証されていないが、法勝寺の造営、白河の条坊計画を考えるうえで重要な論点である。

前掲「法勝寺阿弥陀堂造立日時定記」の勘文には、
 從六条坊門小路南辺垣至于二条大路北^{大路(略力)}辺垣、^{当金}室(堂力)南^{南庇}底、
 北行六百廿三丈二尺、

(本引用中()内は、前掲福山「六勝寺の位置」による)

とあり、金堂南庇は「二条大路北辺」にあたった。

また、同記同年8月25日の条には、

於朱雀門計午正景、庭前燎火揚煙、即於白河院御願寺、遥望火^(其力)共燎火、定知午正立標、景正東西南北、

とあり、朱雀門で煙を焚いて法勝寺からこれを望み、東西南北の方位を仰いだ。朱雀門、法勝寺における位置の詳細は明確にし得ないが、朱雀門は二条大路の北辺に位置し、ここからも法勝寺造営と旧京城二条大路の北辺との密接な関係がうかがえる。

勘文の寸法は六条坊門の南辺を基準としている²⁵ことから、旧京城で計測したとみるべきである。勘文の「二条大路北辺」が旧京城二条大路の北辺を指し、これが金堂南庇に当たるとみれば、白河二条大路末の発掘成果と勘文の内容が矛盾するわけではない。

発掘成果によれば、二条大路末北辺は金堂南庇より北に位置し、勘文通りに造営されたとすれば、鴨川を挟んで二条大路と二条大路末の不一致、あるいは二条大路末の方位の振れが想定される²⁶。

3 法勝寺の建築

3.1 八角九重塔

永保3年(1083)10月1日に供養された八角九重塔²⁷は、その規模・特異な形式から、早くから注目されてきた²⁸。建保元年(1213)再建塔の高さは27丈²⁹、かつて岡崎に残っていた九重塔の基壇跡と考えられる円形土壇の直径は、15間(約30m)あったという³⁰。13世紀半ば頃までは瓦葺であったと考えられる³¹。

裳階 福山氏は伽藍復元図において、九重塔を一边1間の母屋、3間の庇、3間の裳階の平面とし、九重塔をはじめ金堂・阿弥陀堂の裳階に建具を入れる。清水氏は九重塔を福山説と同じ平面形

式とするが、『門葉記』所収法勝寺金堂指図に裳階が描かれないことから、裳階を吹き放ちとする。この指図で庇の柱間すべてに建具、壁が入ることからも、金堂の裳階は吹き放ちと判断される。

さて、永保建立九重塔では文献史料から裳階は確認できないが、九重塔再建供養の『明月記』建保元年(1213)4月26日の条に、

除御塔裳層南北面中央各三間云々、外八面懸御簾、其南面西^(第力)一間為主上御在所、(中略)同東第一間為太上皇御所、

とある。裳階の南北面の中央三間を除き8面に御簾を掛け、南面裳階の西第1間は主上の御所、東第1間は太上皇の御所とされた。

ここで平安時代から鎌倉時代の法会における裳階の用途を概観すると、鷹司本『年中行事絵巻』推定法勝寺大乘会の場面³²では、正面11間の裳階右側4間分に御簾を掛け、左側には参列者が座る様子が描かれる。これは左側では御簾内部を見せるため、意図的に描かなかったのであり、実際には裳階の中央3間を除いて御簾を掛け、御簾を掛けた柱間に参列者が座していたと考えられる。

法勝寺供養会では、金堂の裳階中央3間を除く左右に御簾を掛け、その最も中央寄りの柱間を天皇・上皇あるいは皇后の御座とした³³。また、『経俊卿記』建長5年(1253)12月22日の条によれば、法勝寺阿弥陀堂の再建供養会で、裳階の正面中央5間を除いて御簾を掛け、東面の御簾を掛けた最も中央寄り、すなわち御簾を掛けなかった中央5間の両脇の柱間に天皇・上皇の御座を設けた³⁴。これが創建から鎌倉時代の法勝寺での建築供養会における、裳階の一般的な使用形態であったとみられる。

九重塔の再建供養会でも同様であったと考えられ、裳階南北面でも中央3間左右の柱間に御簾が掛けられ、南面の御簾を掛けた柱間を御所とすれば、前掲『明月記』の記述とも一致する。構造上も、裳階の柱間数は、庇より左右1間ずつ多くなるのが自然であり³⁵、九重塔の裳階一边は柱間5間であったと考えてよからう。

御簾は扉あるいは吹き放ちの柱間に掛けられるべきで、裳階中央3間の左右柱間に御簾が掛けられたとすれば、この柱間も扉あるいは吹き放ちであったことになる。すべての柱間を扉とすることはないのであろうから、裳階は吹き放ちであった可能性が高い。

3.2 常行堂と御所

常行堂 常行堂は中宮賢子追善のため、承徳2年(1085)8月29日に建立・供養された。造営の資材を記した「法勝寺新堂并廊御仏等用途勘文事」³⁶に「御堂釘料」、「廊三字釘料」とあり、常行堂には廊3棟が附属し、瓦について「二万二千六百三十六枚 御堂料」、「三万九千八百廿枚 廊三字料」とあり、常行堂・廊ともに瓦葺であったと考えられる。3棟の廊は、東廊³⁷・西廊³⁸・北廊³⁹であり、西廊には南妻に車寄があり、南北棟と考えられる。

寛治5年(1091)8月7日の地震を受けたとき、『扶桑略記』に「法成寺(中略)、九重塔流星被震傾、(中略)常行堂壁并裳層等、皆以震損」とある。この記事の「法成寺」は「法勝寺」の誤りと判断され⁴⁰、常行堂は裳階を備えていたと考えられる。また、『中右記』寛治7年(1093)3月8日の条に「於常行堂前庭人々有上鞠之興」とあり、常行堂前には蹴鞠を行なう程度の庭があった。**常行堂御所の変遷** 法勝寺供養時、藤原氏累代の釣殿御所があり、ここを御所とした。常行堂建立後は、釣殿に代って常行堂に付属する廊が御所となった。東廊は12世紀半ばには「東寝殿」と呼ばれ、南と東に弘庇が付き、常行堂と透渡廊でつながれていた⁴¹。

御所はさらに13世紀半ばまでに整えられ、その姿を変えていた。

すなわち、阿弥陀堂の再建供養の準備について書かれた、『経俊卿記』建長5年(1253)12月20日の条には、

以常行堂御所為女院御方、(中略)御所北子午廊為同女房台盤所、
(中略)女院御方以東卯酉廊北面妻戸間為御車寄 所妻戸并東御格子等出御几帳帷、北対西妻為女房出車々寄、同対西三ヶ間為女院御方女房壺欄、第四間為同御方女官候所、仰修理職令儲棚、又木工寮進唐櫃、其以東四ヶ間為院御方女房壺欄、以其東端二ヶ間為二品壺欄(中略)、以御堂西卯酉廊為公卿座、同中門廊北方屏内為殿上人候所(中欠)中門前引幔(中欠)刻限所々供掌灯、とある。まず、女院御方とされた常行堂御所の廊についてみると、御所北の「子午廊」すなわち南北棟の廊を台盤所とした。東の「卯酉廊」すなわち東西棟の廊の北面には妻戸があり、ここを車寄とし、その東には格子があった。御堂西の「卯酉廊」すなわち東西棟の廊を公卿の座、御堂西の中門廊の北方を殿上人の座とし、この廊には中門廊・中門が付属していた。次に北対があり、西妻は女房の車寄、西側3間を女院の壺、第4間を女官の場、その東4間を女房の壺、東端2間は二品の壺としており、北対は東西10間以上になる。西に妻があったことから東西棟と考えられる。

また、同記同日の条に「以風爐殿御所為御方口…口、(中略)御湯殿具所口庄儲之、次御湯殿東為台盤所、(中略)以風爐殿北為女官候所」とあり、風爐殿・湯殿が付属していたと考えられる。

13世紀半ばまでに整えられた常行堂御所は、常行堂を中心として御所・透渡廊・西廊・中門廊・中門・北対・風爐殿・湯殿などからなり、その構成は、熾盛光堂を中心とする鎌倉後期の三条白川房⁴²に相通じるものと想定されよう。

3.3 愛染堂

法勝寺愛染堂は、永保3年(1083)10月1日、九重塔と合わせて供養された。暦応5年(1342)3月20日の火災にさいして、「中宮一品記」⁴³では、火災を免れた建築の一つとして、「一円堂 付門二字築垣」と、円堂、築地、門2棟をあげる。

『民経記』天福元年(1233)6月21日の条には、愛染堂で修された十壇愛染王護摩の様子が記され、「参円堂、入円堂東門」、「入円堂東門、四脚門」とあり、東に四脚門があった。また、「十壇円堂正面、東面」とあり、愛染堂は東を正面としていたと考えられる。愛染堂内部では、「中場母屋下敷半帖一枚為御室御座、

(中略)其間庇敷小文三枚、為伴僧八口座」と、母屋に御室御座、庇に伴僧の座が設けられた。

同記には、護摩壇を配置した愛染堂の指図【図4】がのせられ、この指図には三重に柱を回した平面形式で描かれる。中壇南東に御座、その外に伴僧の座となる小文が描かれることから、愛染堂の平面形式は母屋と庇からなり、中央の四方に扉を設けた部分が厨子に相当することがわかる。

十壇愛染明王護摩では、「中壇寸法 方五尺五寸、脇壇 方四尺二寸」とあり、母屋に方五尺五寸の中壇1脚、方四尺二寸の脇壇9脚、寸法不明の本護摩1脚を、厨子を取り囲むように配置していた。「自御室被注遣之間、各触所課人云々、是道場連壇、其所狭之故也」と、余裕があったわけでもないらしい。この点を勘案しても、愛染堂は円堂としては大規模な建築であったことがうかがえる。

3.4 諸門

前掲「中宮一品記」にあげられた建築から、寺地を開いていた門を抜き出すと、南面は南大門と脇門2棟、西面は阿弥陀堂門2棟、西門(西大門)、五大堂門、北面は3棟である。東面は白川の堤となり、門は開かれていなかった⁴⁵。

『明月記』建保元年(1213)4月26日の条には、九重塔再建供養にさいしての門の守護武士について記される。守護武士が置かれたのは、南面は大門・東脇門・西脇門、西面は大門・南門・北門、北面は大門・同小門・東脇門・西脇^(門脱力)であった。

『経俊卿記』建長5年(1253)12月22日の条にも、阿弥陀堂供養当日、門守護武士を配する門として南大門・西大門・阿弥陀堂門二字・薬師堂門・北東端小門等があげられる。実際に守護武士が配された門は、南大門・西二階門・西北門・北門西脇・北門とされる。12月1日の条には、閉じておく門として南大門左右脇門・五大堂門・法華堂門・薬師堂門・東小門をあげている。

以上から東面以外の各面の門をまとめると、南面は南大門と東西脇門、西面は阿弥陀堂門2棟と西大門・西北門、北面は北大門、同小門と東西脇門、北東端小門である。

五大堂門は「中宮一品記」で西面の門とされ、講堂の北西に位置する五大堂近くに想定され、西面北の門と考えられる。

薬師堂門・法華堂門は、薬師堂・法華堂の位置から北面の門と想定される。薬師堂門は、薬師堂⁴⁶、愛染堂⁴⁷の法会にさいして用いられた。薬師堂の位置から、その背後の北大門と推測される。法華堂門は、法華堂に近い北面の東脇門に比定されよう。また、『明月記』の記事からは、北大門には小門があり、東端にも小門があったことがうかがえるが、詳細は明確にし得ない。

西大門 前掲『経俊卿記』にあらわれる西面の二階門は、西大門と考えられるが、西大門は天皇・上皇あるいは法皇の法勝寺への入場に用いられる重要な門であり、論を補っておくことにする。

『玉葉』承元4年(1210)1月9日の記事で、法勝寺修正への行幸に随行した九条道家は「余以下前行、於門外騎馬、其路如例、至於法勝寺東門、二階門、二条末也、下馬」と記す。この記録で、二条大路末の「法勝寺東門」で下馬したとあるが、法勝寺の東面に門はなく、「二条末」の「二階門」と記されることから、この二階門は西大門であったとみられる。また、『葉黄記』宝治元年(1247)8月29日の条には、上皇が御幸で「西面南門焼失、其北門又少々焼損了、仍入御西面二階門」と、西面の「二階門」か

【図4】愛染堂指図⁴⁴ (大日本古記録『民経記』所収指図より作成)

ら入御したとし、この二階門も西大門を指すと考えられる。

以上、西大門を二階門とする記録は、いずれも 13 世紀のものであるが、法勝寺では創建から暦応 5 年（1342）の焼失まで、西大門再建の記事は見いだせない。したがって、西大門は創建当初から二階門であったと考えられる。

4 法勝寺伽藍の復元

4.1 建築の位置関係

まず、これまでに論じられていない建築の位置関係を検討する。**鎮守総社・平橋・反橋** 前掲「中宮一品記」には、焼失した建築として金堂と回廊、鐘楼、経蔵、講堂、阿弥陀堂、九重塔、鎮守総社、南大門・阿弥陀堂門、平橋、南面および西面南方の築地があげられる。延焼範囲は講堂から西南部であり、鎮守総社も伽藍の西南にあったと考えられるが、具体的な位置は不明である⁴⁸。

ここには焼失した平橋とともに、焼失を逃れた「前池反橋」があげられる。『経俊卿記』建長 5 年 12 月 22 日の条には、阿弥陀堂再建供養の当日、上皇・女院・公卿等が常行堂御所から阿弥陀堂へ至る経路について「其路経常行堂西、金堂東、回廊東、并御塔東南、渡平橋西折、傍池畔至阿弥陀堂御所」とある。つまり、常行堂の西を経て、金堂・回廊の東を通り、金堂前の橋から中島に渡り、九重塔の東から南へまわり、中島南の「平橋」を渡って、阿弥陀堂南の御所へと至った。したがって、平橋は中島の南面に架かり、反橋は中島の北面に架かっていたと考えられる。

講堂・法華堂・五大堂 「承暦元年法勝寺供養記」⁴⁹には、「講堂北去十許丈、東西行引主殿寮班幕、東法華堂西不及五六丈、西五丈東裳階中等、」と、講堂の北 10 丈程のところ東西に幕を引いたのであるが、この幕の長さは西が法華堂に 5、6 丈及ばなかった。幕の東は明確でないが、「裳階」は五大堂の裳階とみられ⁵⁰、その「午」つまり五大堂裳階の南面、および法華堂は、講堂の背後 10 丈あたりに位

置していたと考えられる。寺域の北辺が金堂南底からおおよそ 50 丈の位置に想定されること、講堂が金堂の北に位置していたことから、五大堂・法華堂は寺域北辺部に建っていたと考えられる。

なお、『兵範記』仁平 2 年（1152）8 月 16 日の条には、講堂での鳥羽法皇五十算賀の指図がのせられるが、この指図には講堂の前に金堂の一部が描かれ、両者の位置関係を知ることができる。

阿弥陀堂と前池 『経俊卿記』建長 5 年（1253）12 月 22 日の条に、阿弥陀堂再建供養での鋪設について、

東階一丈五尺東西差退、立蓋高座各一脚、其中央立礼盤二脚、其東池行事檢非違使康広・範景等、点上南北十五丈余東池心敷滿板敷堀川木材、以寮職工、□□□之 其上自蓋高座去二丈余、立舞台 方三丈三尺也、自八幡借渡之

とあり、阿弥陀堂東の池には南北 15 丈の仮板が敷かれたことがわかる。福山説では阿弥陀堂前から中島に橋を架けるが、板を敷き渡した以上、この橋はなかったとみられる。

この供養会では、阿弥陀堂基壇東面から東 1 丈 5 尺に高座・礼盤を置き、その東は、池の仮板敷となり、舞台以下の鋪設がなされた。また、舞台は高座から東 2 丈程の位置にあったので、仮板敷は阿弥陀堂基壇東端から高座等の寸法を除いて、1 丈 5 尺丈から 3 丈 5 尺の位置まで迫っていた。したがって池の汀線も、阿弥陀堂基壇かなりの近くまで迫っていたとみられる⁵¹。

この他、小塔院、正庁宝蔵⁵²、大湯屋⁵³があったが、その形式、位置は明らかにし得ない。

4.2 伽藍の復元

寺域については、二条大路末と金堂の位置関係、二条大路末の道幅は、発掘調査に基づく堀内説に従う。また、寺域の北限は、考古学的成果・文献史料からの考察に基づき、冷泉小路末に比定されている発掘遺構の位置とする。金堂の位置・規模・形態は発掘遺構に基づき、回廊の柱間数、鐘楼・経蔵の形式は福山説に従う。講堂・薬師堂・五大堂・阿弥陀堂・常行堂・鎮守総社の形態、愛染堂・法華堂を築垣に囲まれ独立した一郭とすることは清水説に従う。常行堂の一郭を囲む装置は、清水説以上に明確にし得ない。これら以外の建築の形態、位置関係は、本稿の考察に基づく。

以上から、白河天皇（上皇・法皇）により完成された法勝寺伽藍を復元したのが【図 5】である。

【図 5】 法勝寺伽藍復元図

【図 6】 法成寺伽藍復元図

（清水撰『平安時代仏教建築史の研究』より）

5 法勝寺伽藍と法成寺伽藍

ここでは、法勝寺・法成寺の伽藍復元図をもとに、法勝寺が法成寺から何を継承し、如何なる進展をみせたか、とくに金堂とそ

の中尊に注目して述べる。【図6】は、天喜6年(1058)の焼失以前に完成された法成寺伽藍である⁵⁴。この検討にあたっては、法勝寺伽藍を九重塔建立以前と以後に区別しておく必要がある。

法成寺						法勝寺						
建築名称	形式	瓦葺	建立年代	安置仏	内部荘厳	建築名称	形式	瓦葺	建立年代	安置仏	内部荘厳	
金堂	七間四面(推定) 重層・裳階	緑釉瓦	治安2.7.14	1022	三丈二尺金色大日如来 二丈金色釈迦・薬師・文殊 利・弥勒菩薩 彩色九尺梵天・帝釈・四天	金堂	七間四面 重層・裳階 左右に矩形の回廊 先端に鐘楼・経蔵 (法成寺講堂と同じ)	瓦葺 緑釉瓦	承暦1.12.18	1077	三丈二尺金色大日如来 二丈金色多宝如来・花園 敷・無量寿・天鼓雷音 九尺彩色六天 八尺聖明座	每柱間: 両界曼荼羅
新堂 (講堂)	七間(四面) 左右に矩形の回廊 先端に鐘楼・経蔵 (法勝寺金堂と同じ)	瓦葺	永承5.3.15	1050	二丈三尺大日如来 丈六釈迦・空明菩薩・ 大威徳・薬師・延命・ 不動尊	講堂	七間四面 正面に藻庇	瓦葺	承暦1.12.18	1077	金色二丈釈迦如来 丈六菩薩・文殊	柱間法華・ 最勝両部曼荼羅
阿弥陀堂	十一間		寛仁4.3.22	1020	丈六金色阿弥陀九体 金色観音・勢至 彩色四天王	阿弥陀堂	十一間四面 南に弘庇・五間以上 の座	瓦葺	承暦1.12.18	1077	丈六金色阿弥陀如来九体 一丈観音・勢至菩薩 六尺彩色四天王	
五大堂			治安2.7.14	1022	彩色二丈不動尊(康平2.10. 12再建では二丈二尺) 一丈六尺四尊	五大堂	五間四面・裳階	瓦葺	承暦1.12.18	1077	彩色二丈六尺不動尊 一丈六尺四尊	
法華堂 (三昧堂)		檜皮葺	治安2以前	1022		法華堂	一間四面	瓦葺	承暦1.12.18	1077	多宝塔 (金形法華經一巻八巻安置)	
東北院 (常行堂)	方五間・南北西 又庇・南面(仁平3 [1153]再建)		長元3.8.21	1030	金色阿弥陀 観音・勢至・地藏・龍樹	常行堂	方五間・南面 (一間四面裳階付)	瓦葺	応徳2.8.29	1085	等身金色阿弥陀如来 三尺観音・勢至・得大勢 ・地藏・龍樹	
八角円堂	八角円堂		天喜5.3.14	1057	金色丈六阿弥陀如来一体	愛染堂	八角円堂 (各面三間)		永保3.10.1	1083	三日月冠愛染明王	
薬師堂	十五間	瓦葺	万寿1.6.22	1024	金色丈六七仏薬師 丈六観音 金色一丈日光・月光菩薩 彩色八尺十二神将	薬師堂	九間四面		永保3.10.1	1083	丈六金色七仏薬師 日光・月光 大治2.3.7に丈六六字明王 安置(真言六観音と同じ*)	
十斎堂	(天喜火災後平面変更)		寛仁4.開12.27	1020	丈六仏十余体							
西北院	三間四面・東面 南北西に檼・渡殿	檜皮葺	治安1.12.2	1021	三尺金色阿弥陀 観音・勢至・地藏・龍樹							
尼戒壇			万寿3.3.27	1026								
釈迦堂	十三間 中央五間・左右各四間 (天喜火災後七間四面)	檜皮葺	万寿4.8.22	1027	金色丈六釈迦如来 同如来十大弟子八部衆 六尺梵天・帝釈・四天王 金色等身釈迦百体							
観音堂	創建薬師堂から独立?		康平8.10.18	1065								
五重塔*2 東西三層塔	三重・各重裳階 (薬師寺塔婆の模倣)	瓦葺	正暦3.10.5	1079	釈迦八相成道 釈迦八相成道 (薬師寺塔婆安置仏を模倣) 東塔:胎蔵界大日如来四体 西塔:金剛界大日如来四体 薬師・釈迦・阿弥陀・弥勒							
東西五重塔 *2			天承2.2.28	1132		八角九重塔*3	裳階付	瓦葺	永保3.10.1	1083	八尺大日如来四体 金剛界四仏	月輪仏
						北斗曼荼羅堂	一間四面	瓦葺	天仁2.2.27	1109	木像北斗曼荼羅 一字金輪仏頂如来・北斗 七星・九執曜天・十二宮 神・二十八宿等五十六体	
						小塔院			保安3.12.15	1122	小塔二十六万三千基	

【表1】法成寺と法勝寺の建築・安置仏・内部荘厳 (※ゴシック文字は両者の共通項、法成寺は清水「法成寺伽藍の構成と性格」、*1は速水佑『観音信仰』(1970)、*2は富島・高橋「法成寺の塔について」(『仏教芸術』228、1996)、*3は富島「塔における両界曼荼羅空間の展開」(『仏教芸術』238、1998)による)

5.1 九重塔建立以前の法勝寺伽藍

法勝寺創建時の建築は、金堂・講堂・阿弥陀堂・五大堂・法華堂であるが、これらはすべて法成寺伽藍に揃い、規模・形態、安置仏の多くが共通する(【表1】を参照)。中島を持つ園池を中心に、北に金堂、西に阿弥陀堂を配する構成も法成寺と共通する。

法成寺伽藍は、その形態についていえば、平等院など後の浄土教伽藍の発端となる寺院と位置付けられる⁵⁵。しかし、池を取り巻く建築には、大日如来を安置する金堂、五大明王を安置する五大堂といった、明らかに浄土教とは異なった信仰に基づく建築も含まれ、信仰においては浄土教のみに基づいているわけではない。

法勝寺伽藍も、『栄華物語』巻第三十九「布引の滝」⁵⁶に、

御堂のけ高うものものしきが、新しう赤く塗り立てられたるに、

青やかに見え渡されたる御堂の飾りなど、極楽にたがふ所なげり。

とあり、伽藍・建築の形態においては、現世に極楽浄土を造立しようとした浄土教伽藍とみなせよう。しかし、伽藍の最も中心となる金堂は胎蔵界五仏を安置し、密教の両界曼荼羅のうち胎蔵界曼荼羅に基づき、信仰上は浄土教のみに基づくわけではない。

5.2 金堂の形態と中尊・内部荘厳

法勝寺金堂は文献史料⁵⁷・発掘調査⁵⁸から、形式・規模が概ね明らかにされている。七間四面、裳階を備えた重層建築で、東西に各20間の回廊を備え、回廊は南辺で数えて東西に5間伸びたところで南に折れ、先端に鐘楼・経蔵を置く。回廊・鐘楼・経蔵の構成は、先行する法成寺講堂と共通する。

法勝寺金堂には緑釉瓦を用いていたが、法成寺金堂でも同じく緑釉瓦を用いていた。法勝寺金堂では、法成寺金堂と全く同じ規模の大日如来(毘盧遮那如来)を中尊とする。脇侍四仏の種類は両者で異なるが、規模は全く同じで、六天は規模も同じである。母屋柱に両界曼荼羅諸尊を描くことも両者で共通している。

とくに金堂の胎蔵界大日如来は「花葉安置百体釈迦」⁵⁹と、「花葉」すなわち蓮華座の葉に百体の釈迦を安置する特異な仏であった。法成寺金堂の大日如来も「坐中央百葉蓮華座、莊嚴微妙也、一蓮華葉上、百体釈迦又現」⁶⁰と、百葉の蓮華座に座し、蓮華の葉に百体の釈迦を現し、同じ思想に基づくと考えられる⁶¹。このように法勝寺金堂は、法成寺金堂の影響を強く受けていた。

結 一法勝寺伽藍の特徴一

法成寺では、金堂の左右に十斎堂・五大堂が回廊で取り付き、さらに阿弥陀堂・薬師堂が一体となって園池を取り囲む。ところが法勝寺では、阿弥陀堂・五大堂は金堂から切り離されて伽藍の隅に建ち、後に建立される薬師堂・愛染堂・北斗曼荼羅堂も伽藍の周辺部に置かれた。金堂は、伽藍のまさに中心に独立して建つ。

法勝寺の伽藍構成は、金堂を独立させ、伽藍のなかで強調することを意図したものと考えられる。回廊・鐘楼・経蔵によって強調される左右対称の形態も、金堂の独立性を際立たせることになった。つまり創建当初の法勝寺伽藍は、園池・建築・安置仏など、伽藍を構成する要素の多くを法成寺に求めながら、伽藍構成では

金堂を独立させ、その中心性を強調した点が最大の特徴といえる。

また、旧京城と法勝寺との関係も見落してはならない。白河ではまず法勝寺が造営され、その寺域が条坊計画に影響した。法勝寺の造営は旧京城、とくに二条大路および朱雀門と密接な関係があったことは重要と考えられる。発掘成果によれば、金堂は二条大路末の突き当たりに位置する。鴨川と挟んで二条大路と二条大路末に多少の不一致が想定されるが、大内裏の朱雀門前、平安京最大の東西道路である二条大路の延長上に、二階門一西大門を開き、大極殿に匹敵する規模の重閣建築—金堂—を据えた法勝寺は、朱雀門からの景観でも際立つ存在であったと考えられる。

天喜6年(1058)に焼亡した大極殿は、14年後の延久4年(1072)、白河天皇踐祚の年に再建され、その即位式は大極殿で行われた。平安末期以降の朝堂院の衰退が指摘されるが⁶²、白河天皇即位からしばらくは、大極殿・朱雀門をふくむ大内裏は、天皇権力の象徴としての意義を保っていたと考えられる。

白河天皇が御願寺として天皇在位中になしとげた法勝寺および九重塔の建立は、藤原摂関家権力に対する白河天皇権力の優越を誇示することにあつたと考えられる⁶³。その一方で法勝寺の造営は、洛東の地が「京白河」として洛中と並び称される都市へ発展する契機と位置付けられる。新たな都市の構築において、白河天皇権力を象徴する法勝寺は、白河の中核として、同じく天皇権力を象徴する大内裏との密接な関係のもとに造営されたと考えられる。創建当初の金堂はまさにその象徴であり、後の八角九重塔建立もこの構想の延長上にあつたといえよう。

【付記】 本稿の執筆にあたっては、白河での発掘成果について堀内明博氏から多くの御教示をいただいた。ここに記して謝意をあらわしたい。

【註】

- 1 福山敏男『日本建築史研究』（墨書房、1968）。
- 2 福山敏男『平等院と中尊寺』（『日本の美術9』平凡社、1964）。
- 3 林屋辰三郎「法勝寺の創建」（同『古典文化の創造』東京大学出版会、1964）
- 4 清水敏「六勝寺伽藍の構成と性格」（『建築史学』5号、1998.10）、同『平安時代仏教建築史の研究』（中央公論美術出版、1992）に再録。
- 5 浜崎一志「白河の条坊地割」（京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財調査報告』IV、1991）、上村和直「院政と白河」（古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店、1994）、堀内明博「権門の都から洛中辺土の京へ—武家地と町の展開にむけて」（網野善彦・石井進編『中世の風景と読む5』新人物往来社、1995）。
- 6 京都市編『平安建都1200年記念展覧会目録 甦る平安京』（1994）。
- 7 富島義幸・高橋康夫「法勝寺の伽藍と建築」（『建築史学』26号、1996.7）。
- 8 山岸常人「法勝寺の評価をめぐって」（『日本史研究』426号、1998.2）において、前掲註4清水論文、前掲註7富島・高橋論文で、法勝寺の性格を伽藍・建築の形態のみから考察している点が批判されている。本稿では伽藍・建築形態から読み取れる性格を論じることを目的とし、より広い視野から考察は別稿で行う。
- 9 前掲註4浜崎論文。
- 10 藤田経世編『校刊美術史料』寺院編中（中央公論美術出版、1975）所収「諸寺供養類記」。
- 11 前掲註2福山著書。
- 12 前掲註4清水論文で復元図に北対を置くが、本文中では北対にふれられない。
- 13 前掲註4清水論文。
- 14 前掲註5浜崎論文。
- 15 梶川敏夫・渡辺和子「尊勝寺推定地第Ⅲ次発掘調査概要」（京都市文化観光局文化財保護課『京都市埋蔵文化財年次報告1976-II』、1977）。
- 16 京都市埋蔵文化財研究所『白河街区跡RITZ OKAZAKI 新築工事に伴う発掘調査終了報告書』（1988）。
- 17 前掲註6『甦る平安京』展覧会目録。
- 18 前掲註6『甦る平安京』展覧会目録所収の高橋康夫「法勝寺」解説による。
- 19 前掲註5上村論文。
- 20 尾藤徳行・吉村正親「最勝寺跡・岡崎遺跡」（京都市埋蔵文化財研究所『平成6年度 京都市内遺跡立会調査概報』、1995）。
- 21 堀内明博・竜子「白河街区跡・岡崎遺跡」（京都市埋蔵文化財研究所『平成8年度 京都市内遺跡立会調査概報』、1997）。
- 22 前掲註5堀内論文。
- 23 この部分は日付が欠落しているが、他の史料から1月12日と推定される。
- 24 堀内明博「白河街区跡」（京都市埋蔵文化財研究所『平成7年度 京都市埋

蔵文化財調査概要』、1997）。

- 25 同勘文では、阿弥陀堂基壇南端あたりに「二条南小路」、すなわち押小路の北辺から六条坊門南辺の間を計測しており、六条坊門南辺が基準となっていた。
- 26 この点についての厳密な議論は、発掘成果に基づく旧京城二条大路と白河二条大路末の位置関係の検証を待たねばならない。
- 27 『朝野群載』巻第2所収「法勝寺御塔供養祝願文」。
- 28 中郷敏夫「法勝寺八角九重塔雑攷」（『史跡と美術』51、1935）、西田直二郎「法勝寺遺址」（同『京都史跡の研究』吉川弘文館、1961）。
- 29 暦応3年(1340)の写本である「院家雄々跡文」（『大日本史料』所収）。
- 30 前掲註27西田論文。
- 31 前掲註7富島・高橋論文。
- 32 福山敏男「年中行事絵巻の推定法勝寺大乘会図」（前掲註1『日本建築史研究』）。
- 33 前掲註10「諸寺供養類記」所収「承暦元年十二月法勝寺供養記」、「承暦元年法勝寺供養記」。なお、法勝寺供養会の形態は、井上充夫『日本上代建築における空間の研究』（私家版、1961）で考証されている。
- 34 阿弥陀堂は十一間四面裳階付きであるから、その西面の柱間は15間となる。同記に「裳階東南北除五ケ間之外（東南北裳階簀子四面打敷満弘筵 引用部分）内は割注。以下これにならう）黒漆簾代懸巨御簾（懸御簾所、格子、妻戸等暫撤之）」とあり、左右の5間ずつに御簾を掛けたことになる。天皇の御座は「北第五間」、上皇の御座は「南第五間」に設けられたので、御簾の掛けられた部分のうち、最も中央寄りであったことになる。
- 35 庇の柱から裳階の柱に繋ぎ虹梁を架けるとき、繋ぎ虹梁を柱筋に垂直に出すと、左右に柱を1本ずつ入れ、柱間を1間ずつ増やさない限り、裳階兩脇の柱間は、庇と裳階の架行寸法分だけ広くなる。海住山寺五重塔は、裳階の中央2本の柱を抜き、一辺を3間としているが、この五重塔は初重の身舎一辺が10尺に満たない小規模な塔であり、柱の省略も可能であったと考えられる。しかし、大規模な法勝寺八角九重塔では、裳階の柱は省略できなかったであろう。
- 36 『平安遺文』1228号。
- 37 『中右記』承徳2年(1085)9月22日の条に、「於常行堂從今日寅時三ヶ日間有不断念仏也、又其東於御所廊有御經供養」とある。
- 38 『中右記』康和4年(1102)2月26日の条に、「寄御輿於常行堂西廊南妻、西廊引幔、（中略）以常行堂東廊為内御所」、同記同年7月20日の条に、「寄御輿於常行堂西廊南妻、敷筵道也、法王兼御座此御所」とある。
- 39 『殿曆』天永3年(1112)11月25日の条に、「今日於法勝寺奉為上皇余有御賀事、余居奉後下宿所、常行堂北廊」とある。
- 40 前掲註7富島・高橋論文。
- 41 前掲註4清水論文。
- 42 福山敏男「最勝四天王院とその障子絵」（同『日本建築史の研究』、1953）。
- 43 『大日本史料』所収。
- 44 杉山信三氏の御教示による。
- 45 前掲註1福山論文。
- 46 『門業記』延応元年(1239)12月23日の条。法勝寺薬師堂で、尊勝寺で修すべき灌頂を行った記録をのせ、腰輿で薬師堂の門から入り、薬師堂に至った。
- 47 『民経記』天福元年(1233)6月21日の条。薬師堂門を経て愛染堂に至った。
- 48 鎮守社は、例えば東寺では、南大門のすぐ西北に鎮守八幡宮が置かれている。
- 49 前掲註10「諸寺供養類記」所収。
- 50 前掲註4清水論文。
- 51 『作庭記』には、寝殿の前、池の汀線までの距離を記すなか、「堂社などには四五丈も難あるへからす」と、4.5丈でも差し支えないとするが、法勝寺阿弥陀堂と前池の関係はこの記述とよく一致する。溝口正人氏の御教示による。
- 52 『百鍊抄』安貞2年(1228)9月29日の条。
- 53 『兵範記』仁平2年(1152)8月16日の条。
- 54 清水敏「法成寺伽藍の構成と性格」（前掲註4清水著書所収）所収の復元図。法成寺伽藍の沿革は、杉山信三「藤原氏の氏寺とその院家」（同『院家建築の研究』吉川弘文館、1981）においても詳細に検討されている。天喜火災後の再建では承暦3年(1079)に東西塔が建立、承徳元年(1097)の講堂再建で中門・回廊が加わり、釈迦堂の規模が変わるなど、創建から若干変化した点も認められる。しかし、本稿で問題とする伽藍構成については、大きな変更はなかったとみられる。
- 55 康平8年(1065)観音堂が供養されたが、同時に薬師堂も供養されている。12世紀初頭の尊勝寺では、観音堂と薬師堂が独立して建つ（前掲註4清水論文）が、法成寺では創建薬師堂に七仏薬師と六観音をあわせて安置し、天喜火災後の再建は過渡期と位置付けられる。再建では、創建時と同様に一棟に安置しており、再建における薬師堂と観音堂はこれを継承したもので、七仏薬師部分を薬師堂、六観音部分を観音堂と呼んだか、あるいは尊勝寺のように二者を独立させた可能性が考えられる。こうした六観音の独立の背景には、六観音法の発達と考えられる。
- 56 前掲註54清水論文。
- 57 日本古典文学大系『栄花物語』（岩波書店、1965）による。
- 58 前掲註10「諸寺供養類記」の法勝寺供養記など。
- 59 杉山信三・梶川敏夫「法勝寺金堂跡発掘調査概要」（京都市文化観光局文化財保護課『法勝寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告』、1974）。
- 60 前掲註10「諸寺供養類記」所収「承暦元年十二月法勝寺供養記」。
- 61 前掲註10「諸寺供養類記」所収「不知記」。
- 62 法成寺金堂、法勝寺金堂の尊大日如来の蓮華座に現わされた釈迦は、『梵網経』に基づく千釈迦と考えられる。この点は、別稿で詳しく論じることとする。
- 63 溝口正人「中世即位式の空間構造」（上野邦一・片木篤編『建築史の想像力』学芸出版社、1996）。
- 64 前掲註7富島・高橋論文。

(1998年5月8日原稿受理、1998年9月8日採用決定)